

中齋塾 東京フォーラム  
平成 29 年度 第 5 回塾長講話

平成 29 年 6 月 10 日  
於 湯島聖堂

今日の中谷さんの素読は良かったです。久しぶりに人が素読をするのを聞いていて、良いなと思いました。聞き惚れていました。どうぞ自慢して下さい。

猪瀬理事長が「学ぶということで、知れば知るほど楽しくなるし嬉しくなる。難波さんと話をしていると、常に脱皮し続ける人がそばにいと自分も脱皮ができる」というこれまた良い話だなと思いました。海老の話は皆さんご存知ですよ。…ちょっと違う顔をした人がいる。ちょっとおさらいをしておきます。

人生のおめでたの時、結婚式でよく年配者が海老の話をします。「初々しいお嫁さんもお婿さんも腰の曲がる頃まで夫婦仲良く添い遂げなさい」と解説をする人が結構いますが、安岡正篤先生の科白は「腰が曲がるまでではなく海老というものは一生涯、命ある限り脱皮をし続ける。脱皮ができなくなったら、もうその海老の人生は終わり。海老を人生というかどうかは別として人生は終わる。なぜなら殻があって殻の中に収まらない、自分で決めた枠の中に収まらないで発展をしていく」ということです。

池田会員も最初の時点ではやっぱり小さな海老だったと思いますが、人生経験を積んで中身がいっぱいちぎれるようになってくると、今ある事務所や、お客さんの中身とか、だんだん飽き足らなくなってきた、もう少し大きくしたい広くしたいとかなります。池田さんの顔つきを見て弁護士として自信が出て良い顔になってきています。

他の人にいった科白で、本人に「事業拡大して順調にしているようで良いね」と言ったことがあります。そうすると「あれ、塾長は私の事業の中身、知らないでしょう」と言います。「仕事の中身は分からないけれども、今までの姿勢があなたの普通だとすると、今、振り返って立っているから、これは仕事に自信があるからでしょう」と言ったことがあります。大体うまくいかない人は項垂れています。順調にしていると思う時は偉そうになる。驕り高ぶりがでると、胸を張ってさらに偉そうな姿勢になる。本人が「何故」と聞くから、今のことを説明しました。本人と会う度に「少しは減ったか、減ったか」とやり取りをするようになりました。だから池田さんは、くれぐれもこうならないように脱皮し続ける海老になってください。脱皮ができるということは、そこで止まっていないということです。先へ行くということで猪瀬理事長の補足でございます。

人間ってはっきりしていて「真っ直ぐ気をつけ」をさせると、前傾と後ろに重心がいく

人がいます。見ただけで違います。それから顔も下を向く人と、ちょっと視線を上にあげる人がいます。力づくで押し相撲なんかをする時は、よくわかります。下を向いて必死になって前に押そうとする人は力が出ない。前を向いて遠くに焦点を定めて押していくと力が倍増します。少し脱線をしました。でも人生行路が変わりますから、周りにだんだん危ない人が増えてきているから、ちょっとおっかないなと思います。順調にいったら、好きなように、やっていけば一番良いと思う。人生というのは自分でやりたいことをやりたいようにやって、順調にいけば人様の役に立つということになります。これはもう素晴らしい人生だと思います。

## 紹介書籍

『人生は論語に窮まる』 谷沢永一・渡部昇一著 PHP 研究所

このあいだ渡部昇一さんが亡くなったので、読んでみよう思ひまして、それで今回の本は論語で分かりやすく面白いので良いなと思って持ってきました。これは渡部さんが20年前に対談した本です。

## テーマ

### <論語のよみ方を考えてみよう>

今日のテーマは論語のよみ方ですけど、本の接し方みたいなことをお話ししたいと思います。

本の接し方に関して、評論家の谷沢永一さんは40歳で初めて論語ってこんなものなのか。初めて理解し得たといっていました。

『論語』をよく読むとしたら、宇野哲人先生、貝塚茂樹先生。ここら辺が入り始めて、この中にも書いてありますが、穂積重遠さんの穂積論語だとか、それから宮崎市定さんの宮崎論語でしょうか。穂積論語は、いわゆる学会の中からはちょっと離されています。私が好きなのは渋澤論語。渋澤論語は学会の中では、まるで論評に値しないという位置づけです。何故かなと思ったら、学会というのは非常に狭い世界だから、専門家の固まりなので現実には関係ない。文章・漢字ということでのみ理解をしていくから、現実の世界から遊離している組織であると思います。渋澤栄一さんは自分で論語の新しい解釈や、学問的なものが出せないのだから三島中洲先生の知恵を借りた。だから中身は中洲論語ということで、学界からは無効扱いです。本人の業績はまるで気にしないから外される。宮崎市定さん穂積重遠さんらはちょっと毛色が変わっていて学問的な見地で字面の解釈というのを漢字から追っかけないで、言葉の意味。本当の意味は何なんだろう。自分の人生体験と照らし合わせて解釈をしていくというやり方をしています。私は宮崎市定さんの本を、ひと

通り読んで面白いなと思いますけれど、人前でお話をするときは学会の中で認められているスタイルのものを基本に据えて、レベルが上がってきたら、だんだん違うところの物をすればよかろうと思う。

論語を初めて読むときは時事評論が良いと思います。これは渋澤論語で学んだものです。そういう読み方が自分の体にしみ込んでくる読み方であると思います。

本の読み方は、仕事でもいいし、趣味でもいいですし、または人間学と何でもいいです。自分の専門はこれだというのは大体みなさんお持ちですよ。出てこない時は人間学といっておけば大体あたります。

そうすると、自分の専門分野はどんどん掘り下げて、人様に言って憚らないぐらいの知識を30代までに作ってほしいと思います。30代までにというのは「四五十にして聞かゆること無きは、斯れ亦 畏るるに足らざるのみ」という科白が論語の中にあります。40代50代になって世の中に自分が一生懸命に仕事をしてきたものが評価されていないと70・80歳で素晴らしいことができるということは、ちょっと考えられませんね。でも、それが全部ではないと私は思っています。ただはっきりしていることは、後世に名前が出る人も出ない人もそれなりのことをやった人は、若い頃からコツコツと何か学び続けています。だからはっと気がつく素晴らしい物を書いたり、素晴らしい研究をしていると、人生後半になって花が開いてくるようになると思います。

## 私の本の読み方

私は手当たり次第、目についた本を買います。それで軽く目を通します。前は、目を通して付箋を貼っていました。本を汚しちゃいけないと思って線を引かないで付箋を貼っていました。

手当たり次第に読みたいと思う本を買っていましたので、これは知の段階です。知を得る段階ですから、自分でもどこにどういう興味があるのかなと思います。最近は漫画を見なくなったけれど、漫画ですぐに出てくる雑誌名とか単行本はあります。それからSFも見ると、自衛隊が資料を出して書かせているような感じの漫画も見ます。手塚治虫の『火の鳥』が良かったなと思います。漫画も広範囲で素晴らしいものがあるという自覚はあります。それから雑本で最近読んでいてはまっているのが畠中恵の本です。あとは栗本薫の『グイン・サーガ』とにかく種々雑多です。

**第一段階**は何でも読む。その中でショックを受ける本があります。これはと思う本が出てくると**第二段階**です。はっと思ったら、それっきりにする人と、その書いた人のことを知りたくなって掘り下げていく人がいます。

例えば、作家の池波正太郎の記念館は浅草と長野県にあります。浅草は図書館の中の一角に作ってありました。最近は、鬼平犯科帳の世界を高速道路の中に作ったものがありま

す。何回か行ったことがあります。

池波正太郎が鬼平犯科帳を書きたいと思った時、自分の文章がまだ硬い。江戸時代の物語を紡ぎだすのに、もう少し自分の文章が練れたら書こうと温めていました。5〜6年経って雑誌のオール讀物に鬼平犯科帳を書いた。これは長谷川平蔵という人物を氣にしだしてから、江戸時代の風俗、民族、地図など色々な物をどんどん雑識で取り入れて、科白を主体にした物を書こうと思い書き始めたら当たりました。

はっと思う作家が出てきたら徹底的にその作家の生い立ちとか、書いてきた物を掘り下げて調べますと、自分の専門分野に必ずどこかでぶつかる時があります。

面白いと思ったことは、その作家が亡くなった後に、どう物語が続いていくか。書いた人が亡くなったらお終いではありません。池波正太郎は共作ということで、池波正太郎の書いた物をベースにして他の作家が同じような物を、鬼平を考えさせられるようなものをオール讀物に載せていました。名前の通った人物が池波正太郎ばりの物を書いて共作しているということが、この間の発見でした。立ち読みをしたけれど氣になるから注文して取り寄せました。

先ほどの『グイン・サーガ』は、1人の作家が同じテーマで書き続ける物としては世界最長の小説です。現在は同じテーマで色々な作家が書いています。栗本薫が亡くなる時に自分が生み出した『グイン・サーガ』をこれで終わりにするのは忍びない。自分の後を継いで書いてくれる人達がいたら続けてもらいたいという遺言を残しましたので、今は続編みたいなものが始まっています。1人の人が死んだら、その後に物語を続けてくれる弟子たちがいた。池波正太郎の場合は同じぐらいの力量をもっている人達が後を継いでやりだした。

私は論語の中の一番のベースは「述」だと思っています。繋いでいく。次の世代に続けていくことだと思っていますので、次の世代に続けていくスタイルは小説の中からも出てくるのだなと思いました。論語の中のテーマは「述」であると思い定めていますから、そういう他の作家の書き方もピリッときました。

第二段階の私がショックを受けた本は『渋澤論語』です。口述筆記ですけど、今日は本をテーマにしているから、色々そちらの話も致します。

口述筆記は口に出したものを一所懸命に文章にしていきます。私は話があちこち飛びますから、テープおこしをしている人はとても大変です。先ほどの『渋澤論語』は、渋澤栄一さんは気持ちよく自分のことを語っている。語っているものに三島中洲先生の知識を入れました。そして二松学舎の70歳ぐらいの教授が、専門で一所懸命に渋澤栄一さんが言ったことを本に仕立てるべく努力を重ねて口述筆記・渋澤栄一ということで本にしました。だからこれは隠れた学者がいなければ世に出なかった本であるということが一つ。

それから森信三さんの『修身教授録』これも口述筆記です。自分で書いたものではありませんが、ただ頭の中できちんと文章を組み立てて学生に講義したものです。先生が話をするものは、ゆっくり学生が書けるように話をしていった筆記録です。それが後世に伝わ

る『修身教授録』という本になりました。自分で字を書いて残すのもいいけれど、口述筆記も良いですね。

人に話した物が後で文字の固まりとして本になって世に出る。この出だしは何だろうかと思うと、やっぱり『論語』になりますけどね。論語も口述筆記です。孔子が話しているものを、その時の弟子が帯などに書きとる。孔先生が言ったことは忘れないようにメモをする。メモといっても紙に書くわけではなく、自分の衣服の切れ端に書き残す。記憶ある間に竹に一生懸命書き残す。竹簡ですね。だから人が言ったことを一生懸命に書き残して後世の人に伝えるものが今に続いてきて、現在の本になっています。その本が今はパソコンに変わりました。時々、知識の確認・更新をしておかないと、自分で当たり前だと思って書いたり喋ったりしている物が、世の中とまるで違うものになっています。取り残されているという状況になる。取り残されても悪いとは言わないけれども、解釈が全然違うことになる時が怖い。世の中はそれを教えてくれない。論語の解釈でもそうだけど、大学者といわれる人がこんな馬鹿な間違いをした。お弟子さん達はどうして一切指摘をしなかったのかという人が何人もいます。あの人は素晴らしいと名声が出てしまうと、たてつくのは中々できないのでしょうか。

**第三段階**になると、どんどん読みたくなる本が出てくる。一番目は手当たり次第に本を読む。二番目がショックを受ける本。三番目はその道を掘り下げる。その道筋が見えてきて、その道にある本は次々に買いたくなる。

本屋さんに入って、本が私を呼んでいるという段階が第三段階だと思う。何となく本屋に入っていくと、かたまりがある。まあまあ大きさの本屋さんに入るとあっちは若者向け。こっちが年寄り向け、こちら辺が推理小説だとか色々な本のかたまりがある。本屋に入って何となく引き寄せられるように行くと、だいたい自分の好きな本がある。それで眺めていくと向うから飛び込んでくるんですね。私を持って行ってくれという本が。無意識でそういう本を探し出す能力がその人についてしまう。もう本が自分を選んでくれる。そういう段階に入ってくるんだと思います。自分ではそういう感じになっています。

**第四段階**は、何と私は無知だという世界に入る。何で私は物を知らないんだろうという感じになる。何でこんなことが分からないのか。知ったと思えば思うほど、その先は知らないことが増える。一つ二つわかったよと思ってそのポジションに立ってみたら、知らないことがまたたくさん出てくるから何と物知らずよと、つくづく思われる。

色々な方と話をして、何を聞いてもぼんぼんと答えてくれるとか、はっと思うようなことを教えてくれる人で、凄いなと思ったら仲良くするようにしています。もう亡くなっていれば、その方の残した本を眺めてみますと、その本の中に書き込みが結構あります。

例えば論語なら「四書集注」という類のもの。この人はこう書いたけれども私の解釈は違うと書いて纏めた注釈書で本になり世に出る。大体そういう順番を経て人の書いた物を

批評する。何となく論語の解釈本として聖典みたいになっている。「四書集注」は、朱子が書いた講釈です。日本の学者もずっと同じようなことしています。学者はどうしても注釈・批評したくなるということです。

私はものを知らないなということは嫌になるぐらい感じています。ただ自分が分からないものは専門家に電話をかけます。電話で埒が明かなければ出掛けて会う。そのときに色々話ができる。そういう人間関係は作ろうと努力をしないと出来ないの努力をしています。

こういう本の読み方からすると孔子は凄まじい人物だなと思います。何故なら孔子は自分のことは、ものを知らないと言ってはいない。自分は文化の継承者である。そして文化を自分一人で体現し次の世代に伝えるという自覚をもっている人間。だから自分は、自分そのものが文化であると言いきっています。その視点で見ると、孔子はちょっとどうにもならないという存在ですね。

身の周りにいる人達の中でどうにもならないと思う人は、時々ご紹介している加藤常賢先生です。「この専門分野でわしほど研究・勉強を重ねたものがおるか。わしほど調べつくした者はおるか、わしほど考え抜いた者はおるか、いたら出てこい」とおっしゃっていました。そういう匂いを感じさせるのが白川静先生。攻撃的だったのが大野晋という学者。大野晋さんが面白いのは「何で学者になったのですか」と質問をされた時に「知りたいことを一生懸命この意味は何だろうと思ひ、考えてゆく内にはっと分かる。分かるとその次にまた分からない物が出てくる。その繰り返しをしていたら周りが私のことを学者と言うようになった」と。学問の道に進んだから、そうなのでしょう。周りが呆れるほど、労働基準監督署からみたら絶対糾弾されるような勉強の仕方をしています。朝は早くから起きて徹夜の連続をし、お弟子さん達にもそういうことを強いて8時5時ではい終わりなんてやっていたら学問なんかできるかといって。だから労働基準監督所署は真面目に一生懸命やるけれども、あれは日本の国を駄目にする官庁だという感じが私はそういう点からしています。物事を極めるのに、精進していたら、時間から時間で判断されてたまるかと思ひます。ということで周りが認めるほど自分のエネルギーを一つの道に注ぎ込んでいる。だから周りが認める。自分でも自負がでるから「私ほどこの身を削って勉強した人はいないだろう」という科白が出てきます。

「後生畏るべし」という言葉があります。安岡理事長が私の書いた本を見てこういう表現をしてくれました。「畏友というのは後生畏るべしから取っているものですね」と。これは現在85歳の安岡理事長は、ひと回り下の人間でちょっと目を掛けようと思う人がいたら「畏友」と言います。後生畏るべしと思う人間がいたら、それは引き立てようという意味もかなり含まれます。

自分より、ひと回り下の人間でこの人は能力があり才能があつて良いという人いますか。

畑中会員一いますよ。65歳ですけど、この人はたぶん一番長く生きられるかな。

長く生きられそうですかね。120歳は越えますか？

畑中会員一越すでしょうね。親が今96歳で元気なので、私が出会った中では、おそらく一番健康です。

健康長寿ね。本当かどうか知らないけれど126歳という人がいるそうです。今は「畏友」を覚えておいてください。自分の周りで、ひと回り下で素晴らしいなと思う人物、この人にはとても敵わないと思うような人物がどれだけいるか。そうすると自分の器の小ささだとか、ちっぽけさだとか物知らずということをつくづく感じる。それをつくづく感じると負けてなるかという気が起きてきますね。また自分の掘り下げをどんどんやりたくなります。

私は今年から本に書き込みをすることにしました。本は汚してもよい。人によってはページを破って持つ人もいますが、あの心境にはならないので、まず蛍光ペンで塗る。それから書き込みをする。私が死んだ後に本がどう残るか知らないけれども、たぶん死んだらブックオフみたいのに来てもらって本をパッと見て、マーカーのあとがついていたり、書き込みがあると跳ねちゃう。でもこれね後で価値がでるよ。…ということで、明らかに本の読み方が変わりました。前は大事に取り扱っていましたが、今は書き込むようになりました。私が本を読む時の読み方が変わってきたということです。

## 恒例の質問

今回は話の仕方をちょっと変えました。考えてみたら本の読み方について今まで話をしたことがないのでご紹介をしました。では、お聞きするところから始めましょう。

・今月もだいぶ経ちましたね。今月に入って良い日がずっと続いている人は？

・毎晩寝る時に、今日は良い日だったなと思い出して寝る人は？

毎晩寝ることの積み重ねで、手の挙げかたが変わると思いますので、どうぞ毎晩考えてください。

・今月に入って嘘をつくことが少なかったな。考えてみたら、嘘を一度もついてない人は？

いませんか。残念。

・心のこもった有難うを言い、心のこもった有難うを言われ続けている人は？

なかなか心のこもったところが難しいですね。だけど誰でも彼でもすることはないでしょう。この人はと思う人に向けて心のこもった挨拶をすれば良い。心のこもり方が変わると、伝えたいことはきちんと伝わります。言葉だけでなく身体全体で「有難う」を発している人はやはりいます。そうするとただ会っただけで嬉しい。会っただけで有難うという感じです。

・さて今月の健康法はどうでしょう。ずっと健康法を実践し、続けている人？

何か自分なりの節目で根拠を作っておくと良いと思います。日常生活の中で、片足立ちで靴下を履いたり脱いだり出来る人の体力年齢は何歳か。よく体力年齢を調べる時に、右行ったり左行ったり、飛び跳ねたりしますが、そこまでしないで日常生活の中で出来ることを判断基準にすることもよいでしょう。

### 論語の視点 <憲問第14>

私より上手だから、もう一回素読を中谷さん読んでくれないかな。畑中さんは聞いていないから聞かせようと思ったので。

畑中会員一お願いします。

【三八】公伯寮 子路を季孫に懇う。子服景伯 以て告ぐ。曰く、夫子固より公伯寮に惑志あり、吾が力猶能く諸を市朝に肆さんと。子曰く、道の将に行われんとするや、命なり。道の将に廢れんとするや、命なり。公伯寮 其れ命を如何にせんと。

ここが舞台で、客席を真っ暗にして、舞台の真ん中に照明があたって、そこで中谷さんが読んでいるイメージで聴いていました。そうするとその後ろに、公伯寮が出てきて子路が動いて子服景伯かな、ずっと後ろで動いて、特に孔子がいろいろ言っている時の雰囲気は何となくイメージで今読んで浮かんでくる。

女優さんが一人で朗読しているイメージです。まさに目の前で見ているような感じで朗読をする人って結構いると思います。

中谷会員一余計なことよろしいでしょうか。去年から知り合った人ですが、語りをやられる方とお手紙のやり取りをさせていただいて、有難いことに少し移ったのかもかもしれない

です。

当然あると思います。この人いいなと思うと自然とその口調からなにか真似てくる。自分がこの人は良いなと思う人と普段お付き合いをしていると、その人の動作・態度・言葉づかい、知らず知らずに伝染していくと思います。

中村メイコが誰かと喋っている時の話だったと思いますが、声を出す時に高い音程で言う時と低い音程で言う時は使いわけます。お葬式の時受付で明るく挨拶はしない。お葬式なら声を低めます。結婚式なら声を低くして挨拶はしない。行く場所によって音階が変わるもので、知らず知らずの内にその会場の雰囲気という言葉・トーンになります。この人いいなと思ったら、その素晴らしい人の身振り手振りは自然と移るものです。語りなどはそうでしょう。とにかく今日の語りは、読み方が違っていました。無意識だったら、その無意識のままでおやりになるのがよろしいでしょう。とにかく良かったです。

子路が 50 代の終わりの時に士官したと考えてください。孔子が子路を推薦して季孫子に仕えたのが、一回目 45 歳。これは二回目ということなので 59 歳。

公伯寮は子路の悪口を季孫子に対して告げた。人間って何度も告げ口をされていると段々そういう方向にいつてしまいます。知らず知らずのうちに相手を貶めようと策略をめぐらす。褒める場合はそう持ちあげる。貶す場合も同じで、告げ口を公伯寮が季孫子に対して、何人からも言わせればこれはとんでもないということになる。裁判の時だってそうでしょう。証人を次から次に、もっともらしいことをでっち上げていったらば、事実かどうかは別にして、そういう方向に流れになるのではないかな。事実らしいことを言う人がたくさん出てくる。孔子がそれを聞いて「惑志」。疑っているよということです。

「市朝に肆さん」は、処刑して死体を外にさらしておくということです。市は道端。朝は朝廷。孔先生がお望みならば私はそういうことをする力があります。やりましょうかと言ったら、孔子がいうには物事は全て天命だ。(道義) 人と人の道が廢れるというのも天命だし、公伯寮が何をどうしようと、悪さをしようとしてもどうにも出来るものではない。だから人間の浅知恵で天命を左右するなんてことは出来ない。淡々とうけて淡々とやりなさいという会話です。

続きをお願いします。続けて読んだ方がいいと思うので続けて読んでください。

【三九】子曰く、賢者は世を辟く。其の次は地を辟く。其の次は色を辟く。其の次は言を辟く。

【四〇】子曰く、作者七人。

これは解釈を二通りします。「辟く」というのは非難を避ける。

一つは、賢い人間は世の中が乱れていたら、さりげなく身を隠す。公には仕えない。今の日本でいけば官僚にはならないし、行政に入らない。

立派な賢者といわれる人間も段階がある。素晴らしい人間は国が乱れていたら、さりげなく身を隠している。その次に素晴らしい人間は、自分の力は世の中に隠しておくだけではいけない。自分の力、実力を発揮して世の中のために、実力を発揮できる国を探してその国へ動いていく。能力のある人は危難が降りかかってきそう。周りから悪さをされそうだと思った時には、周りの人の顔色・表情・態度をよく見て判断をする。

今でいけば加計学園か。前川事務次官は人の顔色を見て、危ないぞと思って自分の保身を図っている。アメリカでいけばFBIの長官が現役の時にトランプさんと色々やり合った。これはどうしてもおかしいと思ったから、克明にメモを残していた。ここでやり合ったものとは違うものをトランプさんが発表するに違いないからメモを残していった。これは相手の態度・表情・顔色を見て自分の危難を避けますが、人の態度・顔色だけでは分からないから、言葉を聞いて、このような表現をするのはどうも危ない。この言葉の裏に何かあるぞと思ってメモを取り、またはテープを録るということです。それで孔子がいうには、自分の能力はどこらへんかを考えて身を処するがよい。「七人」は多いという意味。けっこう賢い人は世の中多いものだと解釈するのが一つ。

二つ目の解釈は、世の中に賢者といわれる者がいる。この賢者は世の中が安定していて道義が通る世の中であれば、世の中に現れてそれなりの指導力・力を発揮する。ただ道義が廃れて世の中が乱れている時には、さりげなく身を世間の中に沈めて自分の出番が来るのを待っている。

賢者は世を避けて出番を待っている。例えば、日本はどうにもならないと見切りをつけて、まだ他の国のほうがよいかも知れないと思い他国へ行ったら、その国のトップの態度がどうもおかしい。口先だけで自分を持ち上げている気がする。表情が変だし言葉づかいもおかしい。自分は尊敬されていないと思うので、また他の国へ行ったら全くその国のトップと意見が合わなかった。「言を辟く」は、まともに自分の思ったことを言ったら殺されてしまう可能性がとても高いということです。「作者七人」は、その時代でこういう7名の人物がいましたという読み方が二つ目です。

孔子は相手を見ていろいろ説明をしています。その中で自分が気に入ったものを見つければ良いでしょう。ようするに自分の気に入ったものがなければ、自分で作ればよいというのが論語の読み方でございます。論語の場合は色々な解釈がいっぱいあります。

基本哲学「知足」と本の読み方について、普段と話し方を意識してちょっと変えましたからお聞きをします。どちらの解説が聞きやすかったですか。または自分の波長が合うのはどちらでしょうか。

・賢い人、次に賢い人、その次に賢い人という解説と、一人の賢い人の内面をずっと解説していく。どうでしょうか。

半々ですか、難しいね。私が解説する時には会場の雰囲気を見ながら、たくさん手を挙げてくれそうなほうの解説をします。または自分の気に入った解説をします。だからたまには違う解説もしておいたほうが良いなと思い今日はしました。

こういう言葉の説明はあまりしませんが、「世を辟く」の「辟く」は、自分は世の中で受け入れられないから待機しているという意味があります。「作者七人」の「作」は「作つ」（たつ）と読んで、これは完全に引退する。この世の中は乱れていて自分の出番はないから完全に引退をする。引退するのが「作つ」です。

ということで論語の解釈をする時には、この文字はどう読みますか、どういう書き方をして、どう理解しますかということを中心に延々とやっているとお体それで終わります。これもたまにはいいかもしれません。

## 知識

知るというところから始めたから「知る」という言葉でいくと「これを知る者は、これを好む者に如かず、これを好む者は、これを樂しむ者に如かず」と、あります。知るがあつて、好むがあつて、その次に樂しむ。人生はどこに行くかといいますと、先ほどの本の読み方に繋がります。

まず知りたい。知識欲が増えて、どんどん知識が入ってきた。そうしたら、私こういうもの好きだな、何か楽しい。知りたいから好きになって、好きが高じてゆきつくところは樂しむ。樂しむに入る。樂しむに入ると、もう悠々自適の段階に入りますから、論語を讀むのも楽しくなれば良いわけです。どんな本を讀んでいても楽しくなれば良い。人と話をしているだけで良い。

木内信胤先生が「楽しいのと嬉しいの、どっちが上等だと思う？」と聞かれたことがあります。

先生は「楽しいほうが上等だね」と言っていました。でも嬉しいというのは自分の氣持ちを純粹に出すから、人生まだ始まったばかりの時は嬉しいのが良いだろうけれども、だんだん酸いも甘いも噛み分けてくると分かるようになる。楽しい人生のほうが良い。楽しい人生になると時間の受け止め方が変わるみたいです。若い時は、時間がゆっくり流れて

いく捉え方をします。歳を取ると、すぐ一日が終わる。

先ほどご紹介した『人生は論語に窮まる』の著者・谷沢さんは、起きたら書斎へ入って、さあ今日は何をしようかなと思う時間があると嬉しい楽しいとなる。いつも何かの催促があって、今日はこの原稿を書かなきゃ、今日は誰それに会わなければいけない。または何時にどこに行かなければいけないと約束事でいっぱいになっていると、あっという間に一日が終わってしまうのもったいない。できる限り自分の自由時間を増やそうと思うと書いてありました。これは知恵だなと思いました。

ですから、歳を取ったら出来るだけ約束はしない。名刺交換はしない。稼がない。稼がないというのは、ちゃんと生きていくだけの収入の道を計った上でということをつけておかないと危ない。

ちゃんと生きていくだけの収入の道を計った上で約束をしないから、起きてから今日は何をしようかなという時間がたっぷりある。なおかつ健康で行きたい所に行ける体力がある。行きたい所に行ける経済的余裕もあるという人生が良い。そうすると時間がゆっくり流れていく。今日は何して過ごそうかと贅沢な時間を考える。ただ持て余すのはよくないけれども、読みたい本、積んでおく本がいっぱいあって、本をゆっくり読める時間があれば何と幸せなことか。そうすると時間がゆっくり流れていくみたい。ただ氣をつけていることは、やりたいことをやっています。やりたいと思ってやっていることは健康法です。やらなきゃいけないと思ってやってはいません。経済同友会も引退をしましたので、約束をだいぶ減らすことができました。

今年は実に楽しいことになります。有難うございました。